（３０年度）

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
①学習指導	確かな学力の育成	授業を中心とした、生徒の興味・関心・意欲が高まる、しかもわかる授業を展開する。支援・援助の必要とする授業内容では、TT指導や学習支援員の効果的な活用できめ細かな指導を目指す。また、授業教材研究に努め、授業活用プリントや資料の工夫、IT教育機器の積極的な活用を図り、生徒の自己学主力を高める手立てを行う。学力を高める上で、家庭学習課題や課題プリント・副教材の演習問題など積極的に提示し、実施の有無の確認や評価を必ず実施する。	生徒の興味・関心・意欲が高まる、わかる授業づくりに取り組む。TT指導や学習支援員の積極的な活用と授業教材やIT教育機器の有効活用を取り入れる。	最初に「めあて」を提示して授業に臨み,説明を聞く場面,思考する場面,表現や発表する場面を明確にし,生徒が授業で,思考・判断・表現する力を育成する。授業の終わりでは「自己の振り返り」を行うことで,授業理解度や自己課題をはっきりさせ,家庭学習や次時の授業につなげていく。	A	教員の授業実践力が向上し，生徒の興味・関心・意欲を高め,わかる授業が展開されるとともに，学級全体が学習へ向かう態度が向上し，生徒の自己学習力が向上している。	研究部が提示している授業改善の柱の1つに、授業のはじめに「学習のめあて」を提示し、授業の学習意欲を高め、終わりの「振り返り」をすることがある。最初に学習のめあてや内容を明確にし、授業を実践し、終わりに授業内容の理解度や学習意欲の自己評価をさせることで、実りある江津中の授業スタイルの確立をさらに高めていった。 わかる授業づくりを進める上では、各教科間での情報交換、綿密な教材研究、家庭学習につながるわかりやすい授業ワークシートや演習問題プリントの工夫と作成、副教材等の資料、実物投影機や教具の活用した授業を実践してきた。 各教科間では、公開授業と授業研究を実施することで、教員の授業力向上を図った。また、積み重ねの教科や実技を伴う教科では、TT指導や学校支援員の活用を図り、生徒によりきめ細かな指導が行き届くように積極的に継続していった。 言語活動を充実させる思考力、判断力、表現力を育成するために、学習内容に応じて、言語活動場面を取り入れ、既習事項を基に自分の考えをもち、ノート等に言葉で表現したり、ホワイトボードや実物投影機などを使用して発表し合ったりすることで、より深い理解へと導いていった。	A	生徒の興味・関心・意欲を高め，わかる授業づくりを展開するために，全教員が事前に綿密な準備をし，授業のはじめと終わりの時間に「学習のめあての提示」や「授業の理解度や学習意欲に対する自己の振り返り」などを実践した。その結果，生徒たちの学習に向かう意欲の向上が見られたことは大変評価できる。 また教科間を横断的にとらえ，情報交換や公開授業等により，授業力の向上に努めていることがうかがえる。視覚に働きかけた指導も取り入れ、効果が実証されているようで，これら全般の取り組みの継続と更なる探求によって，生徒の家庭学習への取り組みの向上や学力向上に繋がっていけば幸いである。	A	昨年度に引き続き，全ての授業で「学習のねらい」を明確に提示し，「振り返り」を大切に継続することで，学習理解及び意欲のさらなる向上を図る。 わかる授業を進める上で重要な教材研究に力を入れていき，授業展開・授業ワークシートの工夫・演習問題プリントの作成・発問のあり方・ホワイトボードやIT機器の有効な活用・T2及び支援員との連携などに力を入れていく。また，言語活動を充実させる授業展開や授業形態を工夫し，生徒の「学ぶことの楽しさ」を高めていく。 「学び」を知識や技術の習得，学校教育だけといった偏った価値観に終わらないように，人間は文化的・経済的により豊かに生活するために，将来にわたりずっと学び続けることの重要性を強調し，キャリヤ教育も推進していく。
					B	工夫のあるわかる授業が展開され,聞く・考える・表現する場面では,生徒はそれに従って落ち着いて授業受けている。					
					C	授業への取組に個人差がみられ,集中力に欠ける生徒が見られる。					
					D	授業全体に落ち着きがなく,集中力に欠ける。					
			学力向上につながる家庭学習の充実を図るために、学校で作成した「学習の手引き」や各教科で出されている「家庭学習のあり方」をもとに、家庭学習への意識を高める。また、生徒が積極的に家庭学習が取り組めるように各学年および各教科で家庭学習課題の提示と確認・評価を継続する。	学力向上を図るための家庭学習を習慣化させる。 ①各教科の家庭学習課題を提示する。 ②各学年の自学ノートの取組の充実を図る。 ③定期・習熟度テストへの家庭学習取組表の実施を行う。 ④家庭学習調査を行い，毎日の学習時間目標を平均120分以上とする。	A	各教科担任および各学年で家庭学習課題の提示と確認・評価を継続して行い,平日の家庭学習習慣が定着（120分超）	年度当初に「学習の手引き」の活用方法について学級指導を行い、「学習の手引き」や「授業改善アクションプラン」に基づいた授業実践を継続して展開していった。 自学ノートの取組は、全学年生徒に実施し提出させた。各学年部教員が毎日チェックや激励を行っている。未提出の生徒には、昼休みや放課後に実施させるなど、継続してすることで家庭学習の重要性を伝えていき、自学ノートの取組が家庭学習として習慣化してきた。 授業では学習効果を高めるために、次時の授業内容を授業終了時に提示し予習をうながしたり、授業内容の確実の定着のために、副教材の課題提示し確認したり、課題プリントを配布したりした。また、3学期の1月には、5教科において単元テストを設定し、家庭学習の習慣化と学力の充実を図ってきた。 今年度の家庭学習時間調査は、12月の県学力調査前1週間に実施した。1年生では63分、2年生では63分、3年生では98分であった。昨年度の1月の調査に比べ1年生で43分減、2年生で30分減、3年生で39分減となり、家庭学習の時間が大幅に減っていることがわかる。3年生が、他学年と比べて多いのは、部活動もなく、進路希望決定の時期とあって30分程度多いが、県学力調査からのデーターでは、全ての学年で家庭学習の時間が江津市平均では若干低く、県平均では大幅に低いことがわかる。学力を向上させていくには、授業の質の高さと家庭学習時間を伸ばすことが不可欠である。家庭学習の校内調査や県学力調査の結果を踏まえて、各学年部及び各教科担任が積極的に家庭学習課題を提示し、実施の有無の確認とその評価をし、していない生徒には補充学習や補充課題プリントの提供をする必要がある。家庭学習が充実すればその効果が授業でも発揮できるので、本腰を入れて生徒に仕掛ける必要がある。	C	家庭学習の重要性を生徒たちに認識してもらうために，自学ノートの活用は大変効果が出ている。部活動や塾など忙しい中でよく家庭学習をしている方だと思う。また未提出の生徒に対してのきめ細かい対応も評価できる。 今年度家庭学習時間が各学年とも前年度に比べ大幅に減少したが，家庭学習時間の長短のみで学力の高低を判断するのはナンセンスではあるが，密接に関連していることは想像できる。家庭学習時間減少の原因を探るとともに，部活休養日の月曜日を「家庭学習の日」として学習課題を提示し，習慣づけのきっかけにしてはどうか。	B	年度当初，新担当者で「学習の手引き:新年度版」を作成し，すべての教職員で共通理解のもと学級指導をすることによって，授業や家庭での学習の基盤をさらに確立させていく。また，各教科で本校生徒の学習課題を明確にして，「授業アクションプラン」を策定し，授業実践を積み重ね，定期テストや全国及び県学力調査で検証する。 家庭学習時間は，県の平均時間より低いことが課題であることから，5教科を中心に毎時間授業の終りに家庭学習課題を提示，次時にその課題のチェックを確実にする。積み重ねの教科（数学・英語）は，週末課題を与え，また，部活動休養日の月曜日には家庭学習課題を提示し，実践させることで家庭学習の習慣化を図る。なお，学習課題の未実施の生徒については，自学ノート同様，昼休みや放課後を使って，部活動よりも優先し未実施学習課題をさせる対応をとる。 家庭学習時間は，生徒のスマートフォンの所持率が上がるとともに，減少傾向が表れてきた。家庭でも，スマートホンの使用を野放しせず，家庭内の決まりを作り，過度な使用を防止させ，家庭学習を優先していただけるように，PTA総会・学年懇談・期末懇談や学校だより・学年通信を活用して，保護者への啓発を図る。
					B	家庭学習の提示と確認・評価を継続しているが,生徒の家庭学習時間にバラツキがありが,全体としては家庭学習が習慣化（90分以上）					
					C	家庭学習時間が不十分な生徒が多く,全体として家庭学習が停滞 （60分～90分未満）					
					D	家庭学習時間の重要性を意識せず,全体として家庭学習不足で,習慣化にはほど遠い。（60分未満）					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
①学習指導	人権・同和教育の推進	一人一人が認められ、差別や偏見を許さない人権感覚と実践力を養い、いじめのない学校をつくる。	自他の人権を尊重し「差別をしない生き方」ができる力を育てるために、人権集会や人権講演会を通して生徒が考える場を設定する。	・人の個性を認め，助け合いながら生活していくことについて考えるきっかけとなる場として、人権集会や人権講演会を実施する。 ・日常の生徒の様子に応じた指導、助言をする。	A B C D	人権集会や人権講演会を通して、生徒が個性を尊重した生き方について考える。生徒の実態に即した指導ができる。 人権集会や人権講演会を計画的に実施。生徒の言動に対応して指導する。 人権集会や人権講演会の内容が生徒の実態と合わない。指導の時期がずれる。 人権集会や人権講演会が実施できない。平素から、人権についての指導ができていない。	人権講演会は、2学期に人権週間に合わせ実施することができた。東日本大震災後に被災した町に移住し、復興に携わった方のお話を聞き、生徒は人と人の関わりについて考えることができた。また、今年度から生徒会の代議員会の生徒が中心になって準備を進めた。その過程で、事前学習を生徒主体で実施することができた。事前学習を丁寧にすることで、講演についての理解も深まるので、今後もこの方向で進めていきたい。 人権集会については、人権講演会の際に、人権週間の意味や意義を伝える時間を作ることができた。これも生徒会代議員会の生徒主体で取り組むことができたので、今後もこの方向で進めていきたい。しかし、これとは別に、江津中学校の人権宣言をつくっていくための人権集会を実施したかったが、これはできなかった。代議員会で案をつくるところまでしかできていないので、来年度以降につなげていきたい。また、生徒主体の人権にかかわる活動をすすめていくためにも、江津中学校人権宣言を固定されたものと考えず、生徒の実態に合わせ、年度更新していくほうがいいのではないかというアドバイスもあったので、来年度以降、その点についても合わせて考えていきたい。	C	今年度は人権講演会を生徒会が中心となって準備段階から参画し，生徒自身が人権問題に積極的に取り組もうとしていることは評価できる。生徒主体の人権をキーワードに，観念的ではなく所謂「見える化」によって人権感覚やその実践力の向上に努めている様子がわかる。生徒自らが企画から関わることによって，より一層人権に対する意識が高まったのではないかと思う。 しかし，予定していた人権集会が実施できなかったことは残念である。生徒自身が他を思いやり，自分を見つめ直す良い機会なので来年度はぜひ実施していただきたい。	B	来年度も、生徒が主体となって取り組む人権講演会や人権集会を企画していきたい。 また，生徒会代議員会を中心とした、事前学習や活動を充実させていく手だてを生徒会担当と協力して考える。 人権集会については、日時の設定が難しかった。来年度は、設定されている講演会等と合わせて実施する方向を考えていく。江津中学校の人権宣言づくりを中心とする集会を計画していきたい。
	学校図書館・読書活動の推進	多様な価値観に触れ、表現力や想像力を育む読書活動を推進する。	朝読書を継続して行い、学校図書館利用増を目指しての読書推進活動を充実する。	「利用しやすい図書館」として，図書館利用者の増加，家庭での読書の習慣化を図る。教科学習においての図書館利用にも一層の活用を推進していく。読書ノートの活用を継続することで、充実した読書記録とする。	A B C D	図書館利用が増加し，家読が定着（家読30分以上） 図書館利用が増加し，家読が習慣化（家読10～20分） 図書館利用が増加したが，家読が不十分（10分未満） 図書館利用が増加せず，家読も不十分（10分未満）	図書の貸し出し状況を含む図書館の利用状況は、例年同様充実している。図書館の利用に関しては、購入図書の選書に各教科担当の希望を積極的に取り入れることや、生徒のリクエストを定期的に行うことで、生徒が興味関心を持ち、授業でも活用しやすい環境を整えるよう今年度も工夫をしてきた。さらに、図書館だよりや委員会活動での情報提供、季節や行事ごとのレイアウトの工夫もあり、生徒が立ち寄りやすい環境である。さらに魅力のある、利用しやすい図書館にしていくために、継続した活動を行っていきたい。 家読については、今年度も学校として呼びかけを継続している。アンケートの結果から、「本を読むことが好き」と答える生徒は、77．2%と多くいるが、家読とはつながっていない。部活動で帰宅が遅く、毎日の宿題を含む学習時間をとると、家庭での読書時間の確保はなかなか難しいと考える。その中でも、全体の2割の生徒が、家庭での読書を習慣としている。学習時間を確保しながら、家庭の中での時間の使い方を見直してみると読書の好きな生徒が家でも読書をする時間をとることができるのではないかと考える。今後も、本の面白さや読書の良さを伝え、読書啓発に努めていきたい。	C	本校では既存の図書室とは趣を変えて，自由なスタイルの図書スペースとして設置されており，好感が持てる。また図書選定も生徒の意向を踏まえた「需要と供給のバランス」も良好のように思われる。家読の創出は生徒を取り巻く状況を考えると難しい部分もあるが，本を読むことが好きと答える生徒が多くいることは評価できる。 本を読むことは、言葉や文章を通じて想像し感動することであり，動画では養えない力である。言語活動の充実にもつながる所であり，ぜひ教師には生徒たちに，この時期に本を読むことがいかに大切かを教えてほしい。また家庭内の読書環境を促進していくためにも、小中連携での家読週間の導入はぜひ実践してほしい。	B	家読については、引き続き本が好きになるよう読書環境を整えること、本の魅力を伝えること、本を読む機会をつくることが、家読の定着につながると考える。家読週間の導入や小学校との連携も考えていきたい。
①学習指導	言語活動の充実	授業の中で積極的に「言語活動の充実」の視点からの取組を行い、生徒の思考力、表現力、判断力を向上させる。	各教科等で、思考力、表現力、判断力を高める手立てを行う。	全教科の授業で工夫を凝らした思考力，表現力を高める活動を実施する。「話合い活動の基本型」を活用して，各教科である程度統一した指導をし，生徒のグループ討議のスキルを向上させる。今年度は全教員が言語活動を取り入れた授業を積極的に実施し，公開授業で互いに研修を深める。また，試験問題（評価方法）にもより一層の工夫を講じる。	A B C D	全教科で表現活動を実施し，思考力・判断力・表現力が向上 各教科で工夫した表現活動を実施 ほとんどの教科で表現活動を実施 表現活動が不十分で，表現力が高まらず	授業改善の柱を、「自分の考えを表現する力を育成する～根拠をもとに、自分の考えを説明する場面づくり～」とし、全教科で「自分の考えを表現する力を育成する」ための授業展開を工夫した。現2年生の「記述式の問題」の正答率を昨年度と比較をすると、英語は16.6ポイント低く、国語で11.7ポイント高く、数学で0.7ポイント低く、理科が1.3ポイント低く、社会が6.7ポイント高いという成果があらわれた。「自分の考えを表現する力」を育成するために、「自分の考えを説明する場面」を設定し、年間を通じて取り組むことで成果が出ている教科がある。 結果には、教科の特性や設問の影響も考えられるので、今後も継続して取り組む必要がある。一方、各教科担当から「根拠をもとに説明する力」をもっとつける必要があるとの指摘がある。積極的に「話合い活動の基本形」を活用しながら、実践や指導の工夫を積み重ねる必要がある。	B	昨年度に引き続き，「話し合い活動の基本形」を活用し，生徒たちの「思考力，判断力，表現力」の向上への一助になっていることは評価できる。課題解決に向けてグループでの話し合いを通じて自分の考えを整理したり発表したりする活動に継続して取り組んでこられた成果が出てきつつあるようで，良い傾向である。 根拠をもとに説明する力を養うためには，表現するスキルを養うことと併せて根拠を求めるための素材・資料を読み解く力を身に付けることが肝要と考える。生徒たちのこれからの人生でぜひ身に付けてほしいスキルなので，更なる指導をお願いしたい。	B	言語活動の場面で「話し合い活動の基本形」を活用した授業実践を重ね、生徒が「根拠をもとに説明する」ことができるような工夫を広めていきたい。自分の考えを持つために必要な基礎知識の習得は、各教科での小テストや課題、家庭学習等の工夫で強化をするとともに「伝え合う」場面での「聴く力」の向上と、安心して自分の意見が言える雰囲気づくりのために、生徒指導部とも連携し、学習規律の定着を図っていきたい。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
②ふるさと・キャリア教育	ふるさと・キャリア教育の推進	キャリア教育の体制を整えるとともに、将来に生きる大きな夢や希望を育む。「江津の明日を創る人」を育てるために、ふるさと郷土・地域に根ざした各種体験活動を核とした取組を推進する。	地域の教育資源（ひと・もの・こと）を有効に活用し、各学年で系統立ったふるさと・キャリア教育を推進する。	各学年で取り組む，本町探訪，修学旅行の企業訪問，事業所訪問，福祉学習，上級学校調べ，職場体験等の活動が系統的に，より一層充実するように努める。また，地域の「ひと・もの・こと」を活用することで，地域の魅力や課題の理解を進める。	A B C D	全学年において、ふるさと・キャリア教育を複数回計画的に実施した。 ふるさと・キャリア教育を複数回実施した学年と一回実施した学年があった。 各学年、ふるさと・キャリア教育を1回実施した。 ふるさと・キャリア教育を実施できなかった。	各学年ごとに地域の貴重な教育資源である「もの・ひと・こと」を活用した活動を行った。1年生はふるさと探訪として、江津本町の歴史についての話を聞いたり、散策、ウォークラリー、話し合いをとおして、本町の歴史や文化についての認識を深めるとともに、ふるさと江津への愛着を持たせることができた。また、地域へ出かけ活動をしておられる人に様々な話を聞く学習と、世界的なシェアを誇る地元の企業を訪問することをとおして、ふるさと江津の企業についての認識を深め、良さを学ぶ学習も行った。地域の様々な方の力をお借りし、指導を受けながら貴重な体験を行うことで、生徒は江津にある歴史や文化、さらに現状について関心をもつことができた。2年生は学校給食向け野菜生産者との交流会を実施し、生産者の栽培に対する思いや苦労について知り、感謝の気持ちを育むとともに、生命・食物を大切にする気持ちを養い、地域の産物を知ることにより、地域の農業に関心を持ち、郷土を愛する気持ちを高めることができた。 キャリア教育では例年通り1年生は職業調べ、2年生は上級学校調べ、3年では職場体験学習を行った。特に職場体験においては、直接的な体験により、勤労の尊さや意義を考えたり、地元の産業やそれに従事する方たちと触れ合う中で、郷土や郷土の産業への理解を深め、地域への愛着や誇りを持つ良い機会となった。 このキャリア教育と並行して、ふるさと教育を進めることで、興味・関心や課題意識をもって、将来江津で働きたいと思う生徒を増やすことにつなげていきたい。	A	各学年とも，ふるさと江津への理解と愛着を持たせる取り組みがなされており，生徒たちの高校，大学卒業後に大きな成果が現れるのではないだろうか。ふるさと・キャリア教育は年々生徒たちに教育の一環として定着してきており，内容も充実してきている。だが地域との連携でいうと，中学校と地域との連携や情報交換がうまく取れていないように感じる。各地域で様々な活動を展開しているので，中学生もその活動に加われば新たな展開が生まれてくると思う。生徒は毎日忙しく，地域の活動には参加しにくい現状ではあるが，地域の次の担い手として大いに期待している。校区内にある各コミュニティとの情報交換を定期的に行ってみてはどうか。 地元の企業訪問は，将来の人生設計のヒントにもなるので継続して行ってほしい。職場体験は，ここ数年取り組んでいる言語活動推進や規範意識の向上などの指導が活かされ，事業者から概ね好評と聞く。引き続きご指導していただきたい。	A	今年度も地場産業体験および企業訪問の際，スクールバスを借りることができたので，経費の削減ができた。来年度も引き続き要望したい。 地域人材の活用について，学校側だけでの力には限界がある。地域と学校を結ぶ役割を担う「地域コーディネーター」の配置を受けて，学校と地域がより協働できるシステムを構築していきたい。 今年度は昨年度の反省を生かしながら，引き続きふるさとへの愛着と誇りを育むことをねらいとした活動を実施した。今後も今年度の実施内容をしっかりと振り返り，PDCAサイクルを機能させ，一層充実した内容になるように検討・改善を進めていきたい。
③生徒指導	生徒指導の充実	教職員の共通理解・協力体制により、社会規範を遵守する態度を育成する。	躾教育を核とした生活習慣の定着とふるまい向上のため、生徒会と連携しながら指導を行う。	生徒会と連携したふるまい向上等を推進し，生徒の基本的生活習慣，規範意識が向上する。 情報モラルについては，家庭への情報提供し，特に「家庭内の約束」の遵守をめざす。	A B C D	生活習慣，規範意識が向上し，ネットトラブル等が起きない 生活習慣，規範意識が向上 生活習慣，規範意識が向上せず 生活習慣，規範意識が下降	挨拶、返事、靴揃えを基本とし、年間を通じあらゆる機会で繰り返し指導を行った。挨拶の声はまだ十分とは言えないが、靴揃えは多くの生徒が意識して整えるようになり、良き伝統として誇れるようになってきた。また、身だしなみについても多くの生徒がきちんと整えて生活し、落ち着いた学校生活を送ることができた。 不要物の持ち込みや反社会的な行動はなく、一人一人が規範意識を持って生活することができていた。 ネットトラブルについては，1・2学期に数件発生した。一時的な感情で発信したことで、不快な思いをした生徒がおり、家庭と連携しながら指導を行った。外部の専門家を招き、学期に1回情報モラルについての講演を実施し、全校に対してもモラルの向上を図った。また、PTA総会や地区懇談会、期末懇談会などの機会を通じ、保護者に対しても啓発を行った。しかし、家庭内の約束がだんだんと形骸化し、利用時間が守られないなど保護者の意識はあまり高まっていないようである。	B	学校の行き帰りに出会ってもよく挨拶する生徒も多く，多感な時期の中学生としては総じてまじめで素直であると感じる。しかしこちらから挨拶しないと挨拶が無かったり，無言で通り過ぎる子もおり，こちらが気まずくなる時もある。学校は規範意識の向上に共通理解をもって取り組もうとしているが、学校というよりも家庭での幼少期からのしつけが問題であることを保護者に認識していただきたい。 継続的に行っている情報モラルの取り組みだが，年々形骸化が顕著になってきていると同時に生徒の情報モラルの低下が著しい。特に親の規範意識の低下が子どもに反映している。情報化社会の急速な発展により，子どもたちがその荒波に飲み込まれそうな現状は嘆かわしい限りである。 今一度，PTAと連携し，「家庭内の約束」を再検討するとともに親への啓発を行ってほしい。またノーメディア週間が徐々に定着しつつあるので，その検証をしてほしい。今後，その回数や期間を延ばすなどを考えてみてはどうか。家庭との連携・啓発のもと，学校での「生徒指導」の取り組みが不要となる時代を望む。	B	本校では、「挨拶」「返事」「靴揃え」を継続して指導をしてきており、伝統化してきている。ただ、できているからよしとするのではなく、生徒たちがこうしたことの良さを実感できる指導を行い、家庭とも連携していきたい。 情報機器の扱いについては、保護者の意識が大きく反映する。今後もPTA等との連携を行いながら、情報機器の取り扱いや情報モラルについてルール作りを進めていきたい。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	自己評価 評価	学校関係者評価 考察	学校関係者評価 評価	改善策
④健康の増進・体力の向上	学校保健及び食育の推進	学校保健計画に基づいて、生徒の自己健康管理力の向上を図る。また、「食」に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけさせる。	疾病予防等の指導や「食」に関する指導を通して、自己管理力の向上と健やかで逞しい心身の育成に努める。	生徒の自己管理力向上に向けて、家庭への啓発を強化していくため、PTA教養部との連携を充実していく。特に1日のスタートの要となる朝食摂取は、望ましい生活習慣及び食習慣の定着のため欠かせない要素である。今年度も「朝Goはんウィーク」の取組を実施し、全校生徒の朝食摂取率100%を目指す。校区の小学校や栄養教諭と連携をとって実施できるよう進めていく。	A B C D	積極的な健康管理により，健康に配慮した生活が定着 生徒の朝食摂取率が継続して100%となる 自己の健康管理により，健康に配慮した生活が習慣化 自己の健康管理に努力が必要 健康管理が不十分	今年度は、10月に生徒会保健委員会主催で「朝Go飯ウィーク」期間を設けた。期間の実施前に、各教室で保健委員による朝食摂取を啓発する紙芝居を行い、生徒の意識を喚起するようにした。今年度は諸事情から、昨年度のように、江中校区を対象とした広報誌の発行などはできなかったが、「朝Go飯ウィーク」の期間は中学校のテスト期間とあわせて実施することで、同じ期間に校区の小学校でも取り組んでもらうよう協力を依頼した。 その結果、5日間の期間中、毎日朝食を食べてから登校した生徒の割合は男子93.9%、女子97.9%（昨年度男子95.9%、女子92.5%）であった。 学年別に見ると、3年生96．7%、2年生97．2%、1年生93．6%となっている。（2，3年生の女子だけをみるといずれも100%であった。） 2，3年生については一昨年度、昨年度と、栄養教諭の協力をえて栄養指導を行ったり、学校保健委員会の場で「中学生と食事」をテーマに講話を聞いたりする機会があり、自分たちが獲得した知識をもとに、自分の健康の保持増進のための望ましい行動を自ら選択している様子がうかがえる。今後、1年生にも同じように栄養教諭による指導の場を設定するなどして、食（特に朝食）への正しい知識を持ち、主体的に望ましい行動をとることができるよう、学年部との連携のもと取り組んでいきたい。	B	「朝Go飯ウィーク」の取り組みは、小学校との連携で実施することでより大きな成果が出ると思う。保健委員会の朝食摂取の紙芝居などにより、食生活について生徒会や生徒ひとりひとりが考えようとしている姿勢は評価できる。しかしその期間でも食べてこない生徒が少数いる。心身ともに大きな成長を迎える中学生の時期に，理由の如何にかかわらず朝食未摂取の生徒がいることは残念である。自己の健康増進において「食育」はとても重要である。学校側の様々な食に関する取り組みにより，生徒に食の大切さの意識を植え付けられたのは良い傾向である。来年度に向けてPTAとの連携で，朝ごはん100%摂取達成を期待する。	B	小学校からの取り組みの経過もあり、朝食摂取の重要性については生徒の認識は高まっていると思われる。知識だけでなく、これを行動化していくための手立てとして、栄養教諭との連携を強化し、効果的な取り組みとなるよう工夫していきたい。 保護者への啓発については、PTAの役員の方々にも相談させていただき、取組を検討していきたい。
	体力の向上	体力向上に係る体育的活動の推進に努め、生涯に渡る健康なライフスタイルづくりを推進する。	運動の合理的で豊かなな実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	健康なライフスタイルを確立するため，家庭での健康・体力づくりを行う。 体育の授業に於いて保健分野からの指導など授業改善に努めていく。 長期休業前に，体力づくりの啓発を行い，家庭との連携を図る。	A B C D	目標を立て計画的に健康・体力づくりを実践 計画的に健康・体力づくりを実践（２０分以上） 計画的に健康・体力づくりを実践（１０分以上） 健康・体力づくりが不十分（１０分未満）	夏季休業前に各クラスで保健体育の授業時に活動計画表を作成した。多くの生徒が、1日20分程度の運動を毎日設定していた。その内容は、ストレッチや筋力トレーニングなどであった。1日の活動時間が60分程度になっている生徒も少数おり、ランニングを30分程度実施したうえで、ストレッチや筋力トレーニングを行っていた。一方、計画は立てたが、ほとんど実施することができなかった生徒もいたことも分かり、取り組みに意識の差があることも分かった。 2学期は体育委員会の企画として、11月に『体力向上ウィーク』を行い、家庭での運動状況を調査した。実施率を高めるために、委員会でストレッチや体幹トレーニングの方法をプリントやポスターにまとめ、どんな運動をしたら良いかや、日頃の運動をしていない生徒が進んで取り組むことができるように啓発活動を行った。結果は1日の平均の運動時間は1年生が12分、2年生が15分、3年生が10分であった。家庭では、寝る前や朝起きてからなど、時間を自分なりに作って実施していることが分かった。しかし、夏季休業中と同様に全く運動をしていない生徒もみられた。 多くの生徒が計画に対して運動を実施していることが分かった。どのような運動をどのくらい実施したらよいのかを各学年の体つくり運動や体育理論の単元を活用して、考えるきっかけづくりを今後も継続していきたい。また、今年度のように委員会と連携し、生徒からの呼びかけのもと、体力づくりの実践に努めていきたい。	B	ここ数年の継続した取り組みで徐々に定着してきたことは大変喜ばしい。特に今年は「体力向上ウィーク」を実施し，生徒の取り組みへの現状や課題を把握できたことは、来年度につながる良い企画だと思うので継続していってほしい。また，生徒の意見も取り入れて，家庭で自主的に体力作りが出来るようになればなお良い。ただ多様性の時代とは言え，中学生までが運動マニュアルが必要となるとは，この国の先行きに少なからず危惧を覚える。 体力には個人差があるので，それぞれ自分に合った運動を継続していけるよう学校側からも的確なアドバイスをしていただきたい。	B	「体力向上ウィーク」は次年度の生徒会にも引き継ぎ、定着させていきたい。委員会からの啓発方法を工夫し、意識的に運動を取り入れるようにしたい。 4月当初に保健体育の時間に体力テストを行い、現状を把握し、自分の体力に応じたトレーニング内容を考える機会を設けたい。 また、長期休業に入る前に保護者啓発を行い、家庭での運動を一緒に考えてもらうようにしたい。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	自己評価 評価	学校関係者評価 考察	学校関係者評価 評価	改善策
⑤安全管理・指導	学校安全の推進 安全対応能力の向上	安全で安心な危機管理体制の確立に努める。	危機管理マニュアルの改善とともに、毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。	危機管理マニュアルの見直しと，毎月15日の安全点検実施に伴い，点検・修繕・修理を迅速に行う。 食物アレルギー対応委員会を組織し，実態と対応を把握する。	A	マニュアル改善，点検・修繕等を迅速に実施し，安全推進	築11年になる校舎は、あらゆる所で破損・故障が見られるようになり、毎月定期的に実施している安全点検はもちろんのこと、日々の生活の中で情報交換を密にし、点検・修繕に努めている。今年度は，三階の中庭壁上部の剥離が見つかり，市教委に迅速に修繕してもらった。また，引き戸のスムースな開閉については、新しい戸車を調達し，修繕を行った。今年度は，教室にエアコンが設置されたことから，蓄熱暖房の利用場所の変更やエアコンの使用マニュアル作りなど大きな変更があり，電力使用も大きく減少することができた。 危機管理では、養護教諭を中心に新入生に関してもアレルギー面談の時間を設けて、丁寧に対応するなど安心安全な体制の構築に努めた。難病の生徒が入学し，その危機対応のために職員研修を行い，万一に備える体制づくりを確認することができた。 水防法の改正に伴い，危機管理マニュアルの見直しについて確認する必要があり、今後の研修を通して改善を図りたい。	B	築10年が経ち，建物のあちこちで傷みがみられるようになってきているようだ。見つかった時に迅速に修理，修繕に動いておられることは評価できる。生徒の安全を守る観点から，点検はより細かく頻繁に行ってほしい。また生徒目線で気づくところもあるので，生徒も含めた危機管理の体制が必要。 食物アレルギーは命にもかかわる案件なので，アレルギーをもつ生徒たち一人一人に丁寧に対応できたことは高く評価できる。情報を早期に把握し，保護者や小学校とも連携し，よりきめ細かな対応を望む。 また今年，生徒の既往症について，教職員全体で研修を行い，万一の場合を想定した体制づくりが出来たことは本人やご家族の方も大変心強かったと思う。今後も臨機応変で横断的な対応を望む。 自然災害等に対するリスクマネジメントは，現在の気候変動の状況下，想定が困難になりつつあるが，関係機関と連携を密にして決して陳腐な内容とならない，実施マニュアルの策定を迅速にお願いしたい。	B	様々な所で破損や故障が増えてきていることから、毎月15日に行う安全点検をより丁寧に行うようにする。本校では，施設の安全に関する生徒会委員会活動がないため，生徒会本部等が点検活動をできるように検討する。市教委にも状況を伝え、危険な所は早期解決ができるうようにする。 食物アレルギーについては、4月入学予定の生徒の保護者と面談を行いきめ細かい対応を行っている。引き続き，危機意識をもって取り組んでいく。 水防法の改定に伴い，危機管理マニュアルの見直しと訓練の計画は，次年度5月までに計画実施する。
					B	マニュアルの改善，点検・修繕等を迅速に実施					
					C	点検がきちんとでき，必要に応じ修繕・修理					
					D	点検はきちんとできたが，修繕・修理が不十分					
		安全意識を高め、危機回避能力、危機対応能力の向上を目指す。	学校事故、交通事故や薬物乱用等の防止教育を徹底する。	危機回避力習得のための講話，実習等で，生徒の安全意識の向上を図る。特に，自転車通学生の交通マナーを遵守させる。消防署等と連携した計画的な避難訓練を実施する。	A	危機回避の講話，実習等の実施で安全意識が向上	例年1学期に交通事故が多発するため、入学前の新入生説明会でも自転車の乗り方について指導を行うとともに、事前に練習を行うよう呼びかけを行った。また、入学直後に警察の方を招き、講話を行うとともに、学校周辺での乗車練習を行った。その成果もあってか、登下校時の交通事故(自動車との接触)は1件であった。しかし、転倒による怪我は数件発生した。 地区懇談会で保護者に協力してもらい、各地区ごとに安全マップの見直しをした。保護者も地域の安全について意識を高めることができた。 交通マナーについて、まだ並進や見えないところでのノーヘルがあるなど、まだ完全とは言えない点もあるため引き続き安全指導を行っていきたい。 避難訓練については、1学期は火災を想定した訓練、2学期は地震を想定した訓練を行った。消防署から指導に来てもらい、避難の様子についての指導や消火器を用いた消火訓練を行った。多くの生徒が真剣に取り組み、良好な避難態度であった。 薬物乱用防止については、保健体育の授業で扱うとともに、3年生については3学期に外部講師のの方から講話をしていただく予定である。	B	一年生の入学直後の自転車事故もなかったようで学校側が力を入れて指導されたことが伺える。しかし毎年自転車のマナー向上の指導をされているが，特に今年はマナーの悪さが目立つ。並進や一時停止無視，ノーヘルなど危険な運転をしている生徒を少なからず見かける。マナー違反を数回犯した生徒に自転車通学停止の措置をされたのは本人に自覚を促す上でも良いこと。自分が被害者にも加害者にもなりうる乗り物に乗っていることを理解させ，より厳しい指導を望む。また，学校側も通学路の危険な箇所を把握し，警察や関係各所に働きかけ，危険を取り除いていくことも必要である。 避難訓練は様々な場面を想定し，生徒も真剣に取り組んでいたことは評価する。また避難行動について保育所や工業高校と情報交換をしておく必要も感じる。 薬物乱用防止については，昨今メディアで芸能人の薬物使用案件が度々放送され，生徒たちも多少関心があるのではないか。その恐ろしさを知るために定期的な啓発や講演を実施していることは高く評価できる。 保護者と連携した校区内の安全マップの見直しや，警察の方の講演会の実施等生徒の安全意識の向上につながる活動の継続を希望する。	B	校外生活については、学校だけで指導を行うのではなく、家庭や地域との連携が欠かせない。通信や連絡メールのさらなる活用などをし、情報発信に努めたい。また、危険個所については、市教委や警察など関係機関にも連絡をし、通学路の見直しなど改善を図りたい。
					B	危機回避の講話，実習等を実施					
					C	危機回避の講話，実習等を一部実施					
					D	危機回避のための講話，実習が不十分					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
⑥特別支援教育	校内・個別支援体制の充実	特別支援教育の校内体制を整備し、個別の教育ニーズに対応した指導・支援を充実する。	個別の指導計画及び個別の教育支援計画により、支援を充実する。また、実態に応じた進路保障の充実を図る。	特別支援教育コーディネーターを中心にして，個別の指導計画や個別の教育支援計画に基づいた指導・支援が充実する。	A B C D	具体的な教育支援計画を作成し，支援の充実で効果大 具体的な教育支援計画を作成し，支援が充実 具体的な教育支援計画を作成し，一部で支援 個別の教育支援計画に基づいた支援が不十分	教育支援計画の必要な生徒に関しては、保護者と面談し、相談しながら支援計画を作成した。将来の進路を見据えた指導を考え、支援の方法を考えている。それをもとに指導計画の作成の準備に入る予定である。指導計画は、書類の作成を目的にするものではなく、支援の継続や支援の計画がわかるようにするものに変えようと、他の市と情報交換を行っている。	B	特別支援学級の生徒ばかりでなく通常学級に在籍する支援の必要な生徒にも個別の支援計画を作成し，実態にあわせた支援を進められており，体制が充実していることが感じられる。多様なニーズに応じた支援を必要とする生徒は年々増加傾向にある。そういう現状の中で，一人一人の生徒に対して，将来の進路を見据えた個別の支援計画を作成し実施しておられることは高く評価できる。 今後も保護者とも連携を密にしながら，生徒たちが楽しい学校生活を送れるよう計画的で教職員一丸となった支援を続けていっていただきたい。またより良い指導計画を作成するために他の市との情報交換を行っていることは敬意を表する。小学校や上級学校との連携を密にして子どもたちの将来のために努力していただきたい。	A	特別支援教育に関する校内研修を実施し、支援のあり方の共通理解を図る。
	関係機関との連携、他校との交流の推進	教育、医療、福祉等の関係機関との連携を深め、積極的な情報交換を行う。	医療、福祉等関係機関、近隣の特別支援学校との連携を強化する。	関係機関，近隣の特別支援学校等との連絡体制を整え，積極的に連携を図る。	A B C D	積極的に連携を行い，支援が充実 積極的に連携を推進 連携は不十分だが，連絡体制は整備 連携，連絡とも不十分	浜田教育事務所や浜田養護学校,市教育支援センター（あおぞら学園）、市教委と連携をとり、特別支援学級は将来の進路も含めて、相談をかけている。通常学級でも、浜田教育事務所と連携をとりながら、進路を含めて、より良い支援について連絡をとっている。江津清和養護学校について、センター的機能を通じて、指導計画などのコーディネートをお願いしようとしている。中学校区の小中学校で、特別支援教育コーディネーター間の連携強化を計画している。	B	関係諸機関との連携はここ数年しっかりとできている。特別支援学級のみならず通常学級の支援が必要な生徒に対しても他の機関との連携を図り，手厚い支援体制ができていることは高く評価したい。 江津清和養護学校に指導計画などのコーディネートの依頼をしようとしていることは、専門機関による的確な指導が期待できるのでぜひ実現してほしい。また中学校区の小中学校の連携を強化し，子どもたちが安心して学校生活を送るために情報交換を活発に行ってほしい。 難病をり患している生徒への本校の対応の話を聞くと，医療機関と連携を保ち，細やかで生徒に寄り添った姿勢に頭が下がる。是非とも今後もその対応を続けていただきたい。	B	生徒の進路を考えて、見学、相談など養護学校，高等学校との連携を進めていきたい。
⑦研修	校内研修の推進	校内での研修を計画的に行い、授業力の向上に努める。そして、確かな学力を身につけ、主体的に学ぶ生徒を育成する。	校内研修の充実により、授業力の向上をめざし、研究主題の達成に努める。	校内研修会を計画的に行い，「主体的・対話的で深い学び」の視点に立って授業力の向上を目指す。また，授業改善アクションプランを実行し，成果をあげる。さらに「考え，議論する道徳」をめざし授業改善を図る。	A B C D	綿密な校内研修等により授業力が向上し，研究主題が達成。 綿密な校内研修を定期的に実施 校内研修を実施 校内研修を一部実施	研究主題「確かな学力を身につけ主体的に学ぶ生徒の育成」～豊かなかかわりの中で、ともに学び高め合う学習を通して～に迫るための取組として、授業改善アクションプランをもとにした授業改善と生活・学習習慣づくりに取り組んだ。県学力調査の「授業では，学級やグループの中で課題を立てて、その解決に向けて情報を集め，話し合いながら学習活動に取り組んでいると思う」の肯定的意見の割合が全学年の平均で67．8%となっており，昨年度より2．9ポイントよくなった。また、生活・学習習慣づくりとして「始業前着席」・「挨拶（語先後礼）」・「返事」を大切にして全教員で指導を続けた。県学力調査の「授業では学習規律がきちんと守られている」の肯定的意見が3年で89.5%、2年で87.5%、1年で81%と高く、生徒も自覚して授業を受けている。その結果、落ち着いた学習環境が保たれ、学習の定着を支えている。 教育事務所の訪問指導や各学年の授業研究で、「考え・議論する道徳」の授業展開や評価の仕方について研修を深めた。3学期末の評価にむけて、授業での生徒の変容を捉えるため、ワークシート等を活用する予定である。 互いに授業を参観するために授業公開を実施し、振り返りを行った。それぞれの授業の良い点を取り入れたり、課題については改善策を考えたりするなど互いに切磋琢磨することができ、生徒の学力向上に役立てることができた。	B	公開授業が活発に行われ，落ち着いた態度で学習に取り組む生徒の姿が窺われるとともに，先生方も互いに授業力を磨き，学力向上に役立てようとしている姿勢が評価できる。互いに切磋琢磨して授業力向上を図っている努力は，生徒たちの授業に向かう姿勢や学習に向かう意欲に表れていると思うので今後も続けて頑張ってほしい。 また生活・学習習慣作りの指導により，生徒の自覚が増し，学習環境が落ち着いてきたことは必ず学力の向上へつながると思う。今年は「考え・議論する道徳」をめざし，授業研究や研修を重ね，レベルアップを図り授業を展開した。試行錯誤の中、教員全体で頑張っておられると感じる。引き続き頑張ってほしい	B	来年度も公開授業で互いに学びあい、学校教育目標や研究主題を意識し、教員の授業力向上を目指したい。授業改善では「ふり返り」の方法を研修し、授業内容が家庭学習につながるように工夫し、家庭学習の内容を向上させたい。 また、道徳については、生徒の道徳性を育むために「考え、議論する道徳」の実践に向けて校内研修をすすめたい。評価についても、今年度の実践をもとに見直しをしていきたい。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価 達成状況	評価	学校関係者評価 考察	評価	改善策
⑧保護者、地域住民等との連携	情報公開の推進	学校教育の内容や計画を広く情報発信する。	学校だより、学級通信等を定期的に発行し、ホームページの更新を適宜行う。	年間計画に沿って，学校だより，ホームページ等で定期的に情報を提供する。ホームページについては，載せる内容について教職員から意見をもらい充実させていく。また，メール配信システムを緊急連絡だけでなく，諸活動の案内としても有効に利用する。	A	学校だより，学級通信，HP等による有益な情報を定期的に発信	今年度も、毎月1回の学校だより、月の行事予定表を定期的に更新することができた。その他、生徒会活動，部活動の大会結果報告（市大会、県大会、中国大会）、玉江大会等についても発信することができた。また、校内弁論大会、各種コンクールの結果についても、教職員の意見を聞きながら発信した。今年度は，江津中校歌の作詞者の津田さんが亡くなられたという情報をいただき，その記事についてもホームページに掲載し，HPから校歌を聴くことができるようにしたが，HPでの変更や情報発信について，より効果的に，広く地域の方にも伝えられるように取り組みたい。 メール配信システムについては、緊急時以外（部活動、参観日など）にも利用することができた。紙媒体でのお知らせに加えて，メールを発信することで，提出物等の連絡が確実となり，効果を上げることができた。	A	今年も学校だよりの発行やホームページの更新は計画通りにできており，いろいろな情報を早期に得ることができた。ただ，地域への情報発信に関してはまだ不十分である。中学校の現状や中学生の姿がなかなか見えにくいという地域の声もある。公開授業や学校行事，各講演会など，コミュニティや自治会などを通して，地域の方に気軽に学校に出向いてもらえる機会をぜひ作っていただきたい。保護者ではない地域住民としては，地域各家庭のすべてにネット環境がととのっているわけではないので，毎月発行の学校だよりの全地域への回覧を希望する。そのコストパフォーマンスを考えるとハードルは高いとは思うが，ある意味愚直ともいえる取り組みも一考願いたい。 メール配信システムの有効な活用によって，緊急時のみならず学校の諸活動の連絡にも役立てることが出来たことは喜ばしい。今後も全教職員がスキルを身に付け，確実な情報発信につなげていってほしい。	A	来年度も、学校だより、行事予定については、月に1度の更新を行っていく。また、参観日、学校公開日等の情報をアップし、地域の方が学校に来ていただく環境を整備していく。また，来年度は地域コミュニティ交流センターと連携し，センターを通じて，学校だよりを地域の方に気軽に閲覧・配付でできるようにしたい。 メール配信については、年度初めに周知し、教職員全員が扱えることを徹底していく。また、配布物をきちんと保護者に渡す重要性を指導し、メール配信を併用することで確実に連絡することができるので、そのことも含めて活用の仕方を検討していきたい。
					B	学校だより，学級通信，HPを定期的に発行・更新					
					C	学校だより，学級通信を定期的に発行，HPは時々更新					
					D	学校だより，学級通信を定期的に発行，HPは更新できず					
	学校間の円滑な連携・連動の推進	異校種間の連携・連動を図り、生徒の人間力の向上を目指す。	幼小中高の連携・連動を密にして、学校間の円滑な連携に努める。	幼小中高との交流・情報交換会，授業公開を積極的に行う。また，異校種間の共通課題の克服のため保護者への啓発活動をより進める。	A	幼小中高の計画的な交流により連携が充実	小学校との交流については、従来年度末に新入生の授業参観と情報交換を行っていたが、昨年度より出前授業を実施しており，今年度も実施する計画である。小中高と連携したキャリアパスポートの取組が来年度から始まることを受け，現在来年度の連携の在り方を検討しているところである。 例年続いている江津中校区全体で行っている江津中のテスト期間に合わせたノーメディア週間の実施や、「ネット利用の家庭内の約束」づくりは連携して取組んだ。PTA総会や地区懇談会、情報モラル講演会等で啓発を行ったが、生徒指導部が行うアンケート結果によると、昨年に引き続き形骸化しているところもある。生徒指導部と連携して更なる啓発活動を進めたい。 高校との連携では、運動部の交流を引き続いて行った。幼稚園とは、職場体験や保育実習等で充実した交流ができた。 生徒指導面の連携では、生徒指導主事、主任同士の学校警察連絡協議会での情報交換や、月例の校長会，教頭会等で情報や指導事項の共有に努めた。	B	幼小と連携して実施しているノーメディア週間」の取り組みは，ここ数年の継続的な取組によって，家庭の理解も進み定着しつつある。ネットやメディア機器から遮断された環境においては学力が向上している傾向が見られるので，この活動を保護者とも連携して，回数や期間を延ばして実施すると効果はもっと上がると思う。 「ネット利用の家庭内の約束」は今年も講演会や保護者会などを通じて啓発をしているが，なかなか守られていない。アンケートを見ると，学校の指導に期待するような意見を少なからず見かけるが，まず家庭(保護者)の方でしっかり指導していかないといけない問題だと考える。ネット依存に関しては「親」も「子」も全く同じレベルといっても過言ではない家庭も存在していると思う。啓発活動は一朝一夕には進まないが，粘り強く継続していただきたい。この問題は今後ますます低年齢化していくものと思われるので，小学校との連携をより強化して，保護者への啓発も含め，決められた約束を再度厳守するよう厳しい指導をお願いしたい。幼小高との連携・交流はとてもうまくいっていると感じる。キャリアパスポートの導入を踏まえ，現行内容の再検討も含め連携・連動の取り組みの重要性が高まるため，入念な準備を望む。今後も情報交換を密にして，これからの子どもたちの成長に役	B	次年度は，江津中学校区で行っていたスマホ・インターネットの家庭内の約束を，江津市PTA連合会・江津警察署・江津市教育委員会の三者で連携して全市の取り組みとして実施していく。ノーメディア週間は、定着しつつあるが，SNSのつながりは校区を超えて広がっているため，校区内だけでの取り組みでは実効性が高くならない。そのため，市内全域での取り組みとして足並みをそろえていきたい。また、PTA総会等でもしっかりとPRをしたり、PTAの専門部会でも議題に入れるなどして家庭と連携した取り組みにしていく。 ネット利用については、徐々にスマホの所有率が高くなっており、危機的状況にある。保護者の管理のもと正しい使い方ができるように、次年度も生徒対象の校内での講演会とは別に，市内全保護者対象の講演会を引き続き計画し、啓発活動を進めていく必要があると考えている。
					B	幼小中高の計画的な交流を積極的に実施					
					C	幼小中高の交流を実施					
					D	幼小中高の計画的な交流が不十分					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策
						達成状況	評価	考察	評価	